



TITLE:

単体的複体に付随するStanley-Reisner環の極小自由分解とBetti数列(凸多面体の離散構造の現代的諸相)

AUTHOR(S):

日比, 孝之

CITATION:

日比, 孝之. 単体的複体に付随するStanley-Reisner環の極小自由分解とBetti数列(凸多面体の離散構造の現代的諸相). 数理解析研究所講究録 1994, 857: 51-62

ISSUE DATE:

1994-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/83789>

RIGHT:

単体的複体に付随する Stanley-Reisner 環の 極小自由分解と Betti 数列

日比 孝之 (北海道大学 理学部)
Takayuki Hibi

頂点集合 $V = \{x_1, x_2, \dots, x_v\}$ 上の単体的複体 Δ とは、 V の部分集合の集合であって (i) $\{x_i\} \in \Delta$ ($1 \leq i \leq v$) (ii) $\sigma \in \Delta$, $\tau \subset \sigma \Rightarrow \tau \in \Delta$ を満たすものである。いま、各 x_i を体 k 上の不定元と考え、 $A = k[x_1, \dots, x_v]$ を多項式環で $\deg x_i = 1$ ($1 \leq i \leq v$) とする。次に、 A の square-free な単項式 $x_{i_1} x_{i_2} \cdots x_{i_r}$, $1 \leq i_1 < i_2 < \cdots < i_r \leq v$, で $\{x_{i_1}, x_{i_2}, \dots, x_{i_r}\} \notin \Delta$ なるものの全体が生成する ideal を I_Δ とし、 $k[\Delta] := A/I_\Delta$ を Δ の Stanley-Reisner 環と呼ぶ。本稿では、 $k[\Delta] = \bigoplus_{n \geq 0} (k[\Delta])_n$ の A 上の次数付加群としての極小自由分解

$$0 \rightarrow \bigoplus_{j \in \mathbb{Z}} A(-j)^{\beta_{hj}} \xrightarrow{\varphi_h} \cdots \xrightarrow{\varphi_2} \bigoplus_{j \in \mathbb{Z}} A(-j)^{\beta_{1j}} \xrightarrow{\varphi_1} A \rightarrow k[\Delta] \rightarrow 0 \quad (1)$$

を考察の対称とする。ここで $h = \text{hd}_A(k[\Delta])$ は $k[\Delta]$ の A 上の homological dimension である。

【a】 頂点集合 $V = \{x_1, \dots, x_v\}$ 上の単体的複体 Δ があつたとき、 $d = \max\{\#\sigma; \sigma \in \Delta\}$ と置き、 Δ の次元を $\dim \Delta = d-1$ と定義する。また、各 $\sigma \in \Delta$ を Δ の面と呼ぶ。

【b】 一般に、 $v-d \leq h \leq v$ が成立し、特に $h = v-d$ となるとき $k[\Delta]$ は Cohen-Macaulay (或いは Δ は k 上 Cohen-Macaulay) と呼ばれる。

【c】 さて、 $k[\Delta]$ の A 上の極小自由分解(1)において、 $\beta_i = \beta_i^A(k[\Delta]) := \sum_{j \in \mathbb{Z}} \beta_{ij}$ を $k[\Delta]$ の A 上の i 番目の Betti 数と呼ぶ。また、 $k[\Delta]$ が Cohen-Macaulay のとき、 $\beta_h^A(k[\Delta])$ を $k[\Delta]$ の Cohen-Macaulay 型と言って $\text{type}(k[\Delta])$ で表す。

【d】 単体的複体 Δ の係数体 k を持つ i 番目の被約 homology 群を $\tilde{H}_i(\Delta; k)$ で表す。すると

$$\beta_{ij} = \sum_{w \subset V, \#(w)=j} \dim_k \tilde{H}_{j-i-1}(\Delta_w; k) \quad (2)$$

であり (Hochster), 従つて

$$\beta_i^A(k[\Delta]) = \sum_{w \subset V} \dim_k \tilde{H}_{\#(w)-i-1}(\Delta_w; k)$$

となる。特に、 $k[\Delta]$ が Cohen-Macaulay ならば、その Cohen-Macaulay 型は

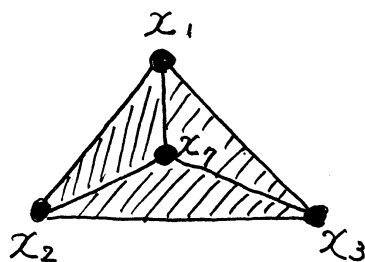
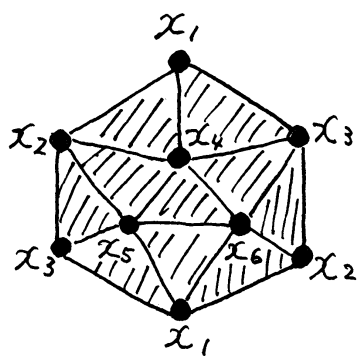
$$\text{type}(k[\Delta]) = \sum_{w \in V} \dim_k \tilde{H}_{d-1-\#(w)}(\Delta_{V-w}; k)$$

である。

【e】 たとえば、下図の単体的複体 ($v=7, d=3$) を考えよう。このとき、 Δ は任意の体 k 上 Cohen-Macaulay であるが、

$$\text{type}(k[\Delta]) = \begin{cases} 4 & \text{char}(k) \neq 2 \text{ のとき} \\ 5 & \text{char}(k) = 2 \text{ のとき} \end{cases}$$

である。



なお、Cohen-Macaulay 単体的複体に限っても、 $\beta_i^A(k[\Delta])$ は $i \geq 3$ のとき体 k の標数に依存するか、しかし、任意の単体的複体 Δ に対して、 $\beta_2^A(k[\Delta])$ は体 k には無関係である。

【f】 極小自由分解(1)が純であるとは、各 $1 \leq i \leq n$ に対して $C_i \in \mathbb{Z}$ が存在し $\beta_{ij} = 0, \forall j \neq C_i$, となるときを言う。すると(1)は

$$0 \rightarrow A(-C_n)^{\beta_n} \xrightarrow{\varphi_n} \dots \xrightarrow{\varphi_2} A(-C_1)^{\beta_1} \xrightarrow{\varphi_1} A \rightarrow \mathcal{R}[\Delta] \rightarrow 0 \quad (3)$$

と表せる。ここで $0 < C_1 < C_2 < \dots < C_n$ である。数列 (C_1, C_2, \dots, C_n) は純な極小自由分解(3)の型と呼ばれる。

【g】 純な極小自由分解(3)のBetti数列 $(\beta_1, \beta_2, \dots, \beta_n)$ と型 (C_1, C_2, \dots, C_n) の間には、関係式

$$\beta_i = \left| \prod_{j \neq i} \frac{C_j}{C_j - C_i} \right|, \quad 1 \leq i \leq n$$

が成立する(Herzog-Kühl)。

【h】 他方、純な極小自由分解(3)において $C_i = i + (m-1)$, $1 \leq i \leq n$, が成立するとき、(3)は m -linear resolution と呼ばれる。

【i】 単体的複体 Δ の面 σ で $\#(\sigma) = i+1$ となるものの個数を $f_i = f_i(\Delta)$ で表し、 $f(\Delta) = (f_0, f_1, \dots, f_{d-1})$ を Δ の f -列と呼ぶ。いま、単体的複体 Δ はCohen-Macaulayであると仮定すると、 $\mathcal{R}[\Delta] = A/I_\Delta$ の A 上の極小自由分解(1)が

m -linear resolution となるための必要十分条件は

$$(i) \ f_i = \binom{v}{i+1}, \ 0 \leq \forall i \leq m-2$$

$$(ii) \ f_{m-1} = (-1)^{m-1} \sum_{i=0}^{m-1} (-1)^i \binom{v}{i} \binom{d-i}{d-m}$$

が成立することである。

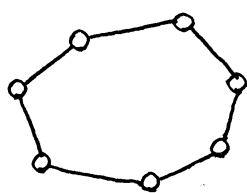
さて、本稿では下記の研究課題に関連して最近得られた結果を簡潔に概説する。

① Cohen-Macaulay 単体的複体 Δ で $k[\Delta] = A/I_\Delta$ の A 上の極小自由分解の総となるものを分類せよ。

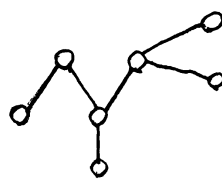
② 単体的複体 Δ が Cohen-Macaulay であるとき、 $k[\Delta] = A/I_\Delta$ の A 上の Betti 数 $\beta_i(k[\Delta])$ を具体的に計算するための組合せ論的公式を探せ。

Ⅱ 純は極小自由分解を持つ Cohen-Macaulay 半順序集合

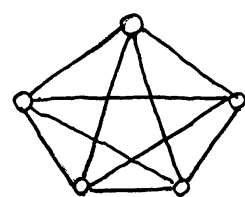
(1.1) 単体的複体 Δ の次元は 1 (i.e., $d=2$) であるとせよ。このとき、 Δ は頂点集合 V 上の (単純) graph である。たとえば、



cycle



tree



complete graph

命題. 次元 1 の単体的複体 Δ の Stanley-Reisner 環 $k[\Delta] = A/I_\Delta$ の A 上の極小自由分解が純となるためには、 Δ が (i) complete graph, (ii) forest, (iii) cycle のいずれかであることが必要十分である。■

(1.2) 有限半順序集合 P に含まれる全順序部分集合を P の鎖と呼ぶ。いま、 P の鎖の全体を $\Delta(P)$ で表すと、 $\Delta(P)$ は P を頂点集合とする単体的複体となる。そこで $\Delta(P)$ を P の順序複体と呼ぶ。半順序集合 P が Cohen-Macaulay であるとは $\Delta(P)$ が Cohen-Macaulay 単体的複体であるときを言う。半順序集合 P の分解 $P = P_0 \cup P_1 \cup \cdots \cup P_{d-1}$ (disjoint

union) が P の階数分解であるとは、 P の任意の極大鎖が $x_0 < x_1 < \dots < x_{d-1}$, $x_i \in P_i$ ($0 \leq i \leq d-1$)、なる型であるときを言う。このとき P の階数を $\text{rank}(P) = d-1$ と定義する。Cohen-Macaulay 半順序集合 P には階数分解が存在する。

(1.3) 階数 $d-1$ の Cohen-Macaulay 半順序集合 P の極大鎖の個数は少なくとも $\#(P) - d + 1$ である。更に【i】の事実より次が従う。

補題. 階数 $d-1$ の Cohen-Macaulay 半順序集合 P の順序複体 $\Delta(P)$ の Stanley-Reisner 環 $k[\Delta(P)] = A/I_{\Delta(P)}$ の A 上の極小自由分解が 2-linear となるための必要十分条件は P の極大鎖の個数が $\#(P) - d + 1$ となることである。■

(1.4) さて、純な極小自由分解を持つ Cohen-Macaulay 半順序集合を分類する際の鍵となるのは次の結果である。

補題. 階数 $d-1$ (≥ 2) の Cohen-Macaulay 半順序集合 P の階数分割 $\tilde{P} = P_0 \cup P_1 \cup \dots \cup P_{d-1}$ とし、 P は \bowtie を部分半順序集合として含まないと仮定せよ。このとき $k[\Delta(P)] = A/I_{\Delta(P)}$ の A 上の極小自由分解が純であるならば P の極大

鎖の個数は $\#(P) - d + 1$ である. ■

(1.5) 階数 $d-1$ の Cohen-Macaulay 半順序集合 P が complete intersection であるとは、 P の階数分解 $P = P_0 \cup P_1 \cup \dots \cup P_{d-1}$ において $P_i \cup P_{i+1} = \bigtriangleup$ ($0 \leq i < d-1$) となるときを言う。このとき $k[\Delta(P)] = A/I_{\Delta(P)}$ の A 上の極小自由分解は純であって、その型は $(2, 4, 6, \dots, 2d)$ である。

(1.6) 純な極小自由分解を持つ Cohen-Macaulay 半順序集合は次のように分類される。

定理([B-H]). 階数 $d-1$ (≥ 1) の Cohen-Macaulay 半順序集合の階数分解 $P = P_0 \cup P_1 \cup \dots \cup P_{d-1}$ において、 $\#(P_i) \geq 2$ ($0 \leq i \leq d-1$) を仮定せよ。このとき、Stanley-Reisner 環 $k[\Delta(P)] = A/I_{\Delta(P)}$ の A 上の極小自由分解が純となるためには、次のいずれかが成立することが必要十分である：

- (i) $d=2$ で $\Delta(P)$ は cyclic ;
- (ii) P は complete intersection ;
- (iii) P の極大鎖の個数は $\#(P) - d + 1$ である。

[略証] まず、 $e[\Delta(P)] = A/I_{\Delta(P)}$ の A 上の極小自由分解が純であると仮定する. このとき、 $d=2$ ならば補題 (1.1) より $\Delta(P)$ は cycle である. 次に、 $d \geq 3$ とし、 $\Delta \not\subset P$ とすると、補題 (1.4) より (iii) が成立する. 他方、 $\Delta \subset P$ ならば $\cdots \not\subset P$, $\mathbf{I} \not\subset P$ が Hochster の公式 (2) より従うので、結局 P は (ii) となる. 逆に、 P が (i), (ii), (iii) のいずれかならば、 $e[\Delta(P)]$ の A 上の極小自由分解は純となる. ■

III Cohen-Macaulay 半順序集合の Cohen-Macaulay 型

(2.1) 有限半順序集合 P があつたとき、 $P^\wedge = P \cup \{0^\wedge, 1^\wedge\}$ と置く. ただし、 $0^\wedge < x < 1^\wedge$ ($\forall x \in P$) である. 半順序集合 P^\wedge の Möbius 函数 $\mu = \mu_{P^\wedge}$ とは、次のように定義される写像 $\mu: \{(x, y) \in P^\wedge \times P^\wedge; x \leq y\} \rightarrow \mathbb{Z}$ である:

$$(i) \quad \mu(x, x) = 1, \quad \forall x \in P^\wedge;$$

$$(ii) \quad \mu(x, y) = -\sum_{x \leq z < y} \mu(x, z) \text{ if } x < y \text{ in } P^\wedge.$$

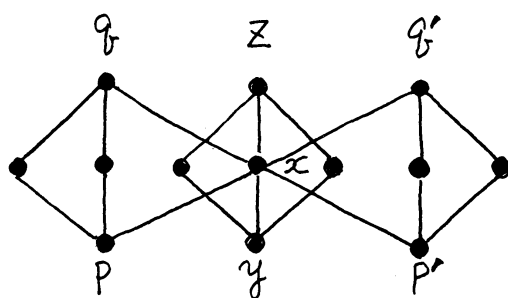
(2.2) 有限半順序集合 L が束であるとは、 L の任意の元 α と β に対して “join” と呼ばれる上限 $\alpha \vee \beta$ と “meet” と呼ばれる下限 $\alpha \wedge \beta$ が存在するものである。特に、 L には最小元 0^\wedge と最大元 1^\wedge が存在する。

(2.3) Cohen-Macaulay 半順序集合 P があ、たとき、 P の鎖 $C: x_1 < x_2 < \cdots < x_r$ が essential であるとは

$$\mu(C) := \prod_{i=0}^r \mu(x_i, x_{i+1}) \neq 0$$

なるときを言う。ここで $x_0 = 0^\wedge$, $x_{r+1} = 1^\wedge$, r は任意の非負整数で μ は P^\wedge の Möbius 函数である。また、 P の essential な鎖 C でいかなる真の部分鎖 C' も essential でないとき、 C を fundamental な鎖と呼ぶ。特に、 $\mu(0^\wedge, 1^\wedge) \neq 0$ のとき、空集合が P の唯一つの fundamental な鎖となる。我々は P の fundamental な鎖の全体を $\mathcal{F}(P)$ で表す。

(2.4) たとえば P を下図の Cohen-Macaulay 半順序集合とすると、 P の fundamental な鎖は $x, y < z, p < q, p' < q'$ となる。



(2.5) 有限束 L が modular 束であるとは、 L の任意の元 x, y, z で $x \leq z$ なるものに対して $x \vee (y \wedge z) = (x \vee y) \wedge z$ が成立するときを言う。半順序集合 P があって $L = P^\wedge$ が modular 束ならば P は Cohen-Macaulay である。

定理 ([H]). 有限束 $L = P^\wedge$ は modular 束であると仮定せよ。このとき、Cohen-Macaulay 半順序集合 P の順序複体 $\Delta(P)$ の Stanley-Reisner 環 $k[\Delta(P)]$ の Cohen-Macaulay 型 $\text{type}(k[\Delta])$ は

$$\text{type}(k[\Delta]) = \sum_{c \in \tilde{F}(P)} |\mu_{P^\wedge}(c)|$$

である。■

たとえば、(2.4) の Cohen-Macaulay 半順序集合は $L = P^\wedge$ が modular 束であって $\text{type}(k[\Delta(P)]) = 10$ である。

(2.6) 素数 $p > 0$ と $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_\ell) \in \mathbb{Z}^\ell$, $\lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \dots \geq \lambda_\ell > 0$, があつたとき、 $G_\lambda(p)$ で型 λ の有限可換 p -群を表す。すなわち

$$G_\lambda(p) = (\mathbb{Z}/p^{\lambda_1}\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/p^{\lambda_2}\mathbb{Z}) \times \dots \times (\mathbb{Z}/p^{\lambda_\ell}\mathbb{Z})$$

である。いま、 $\mathcal{L}(G_\lambda(p))$ で $G_\lambda(p)$ の部分群の全体を包含関係で成す束を表すと、 $\mathcal{L}(G_\lambda(p))$ は modular 束となる。このとき、 λ を固定すると $\text{type}(\mathcal{L}[\Delta(\mathcal{L}(G_\lambda(p)))])$ は p に関する整数係数の多項式となる (森田英章、修士論文(準備中))。ただし、その係数は必ずしも非負とは限らない。

参考文献

- [B-H] W. Bruns and T. Hibi, Cohen-Macaulay partially ordered sets with pure resolutions, submitted.
- [H] T. Hibi, Cohen-Macaulay types of Cohen-Macaulay complexes, J. Algebra, to appear.